

# イスラエル内乱？アシュケナージとセファルディの対立とイスラエルの未来

ラムジー・バルード著、脇浜義明訳     Palestine Chronicle、2025年4月2日



「内戦」という言葉は、今日イスラエルの政治家が使う最も支配的な言葉の一つだ。(Design: Palestine hronicle)

アシュケナージは政治力の大部分を失いつつあるが、経済カードの大部分を保持し続けており、破壊的なストライキや市民的不服従につながる可能性がある。

現在「内乱」という言葉がイスラエル政界で盛んに使われている。これは、イツハク・ヘルツォグ大統領が単なる警告として使った言葉だが、今やイスラエル政界で一つの可能性と認められている。

元首相のエフド・オルメルトは3月24日のニューヨーク・タイムズのインタビューで、「ネタニヤフは自分以外のすべてを犠牲にして自己保身をはかっている。そのため、予想外に事態が内乱に近づいている」と述べた。その根拠になっているのは、イスラエルが政治的に二極分離していることである。戦争、政府の役割、司法、予算、その他の問題に関して意見が異なる二つの勢力が争っているからである。

しかし、この考え方は必ずしも正確とは言えない。政治路線で二極化する国はいくらでもある。大衆の抗議運動が頻発し、それに対する弾圧も厳しいことは、必ずしも内戦に近いという兆候にはならない。イスラエルの場合、すぐに内乱という言葉が使われるのは、歴史的脈絡と社会の人種の構成に由来するからである。

重要であるがあまり人目に触れないようにされている資料として、「イスラエル：セファルディとアシュケナージ対立とそれが意味するもの」と題するCIA報告がある。これは深い社会的・経済的、従って政治的亀裂を持った国家の将来のシナリオを詳述しているという点で、予言的な報告といえる。これが作成されたのは、メナヘム・ベギンのリクード党が48議席獲得し、シモン・ペレスの労働党が47議席獲得した1981年選挙の直後の1982年だが、発表されたのは2007年であった。

アシュケナージ（西洋のユダヤ人）が、何十年にもわたって、イスラエルの権力のすべてを支配してきた。これは当然で、シオニズムは基本的に西洋のイデオロギーで、国家のすべての構成要素 — 軍（ユダヤ人入植者の軍事（テロ）組織ハガナー）、議会（ユダヤ教の大集会を意味するクネセト・ハツェグドラー）、入植（ユダヤ機関）、経済（委任統治領パレスチナのユダヤ人社会で結成された労働総同盟ヒスタドルート）は、主として西洋ユダヤ人が支配してきた。

中東地域やアフリカのアラブ人の子孫であるセファルディやミズラヒがイスラエルへやってきたのは、歴史的パレスチナの廃墟にイスラエル国が建国されてからであった。その頃には、アシュケナージが支配的機構を確立し、政治・経済を運営し、支配者言語（ヘブライ語）を作り出し、すべての面での決定権を確立していた。

東欧ユダヤ人ベギンが1977年と1981年に勝利したが、これはアシュケナージ労働党支配に対する困難な闘いであった。リクード党はいくつかの右翼グループの集合体で、その4年前に設立された。リクード党は、周辺化されたイデオロギー・グループ（修正シオニスト）や民族グループの不満に訴え、それを操作・利用して、アシュケナージ主導の労働党を権力の座から外すことができた。

1981年の選挙は、労働党が権力を、ひいては階級的優位を取り戻すための必死の試みだった。しかし、ほぼ完璧なイデオロギー的分裂は、イスラエルの政治が民族的秩序によって支配されるようになったという、多くの選挙と今後数十年にわたってイスラエルを支配することになる新たなルールを浮き彫りにしただけだった。東対西、宗教的狂信主義対民族主義的過激主義、しかししばしば「リベラル」の仮面をかぶったもの、などである。

その後、イスラエルは外部危機おかげで、もっと正確に言えば外部危機を作り出して、国内亀裂を顕在化しないようにしてきた。例えば、1982年のレバノン戦争で、これのおかげで、暫くの間だったが、国内の社会的ダイナミックの変動から目を逸らすことができた。

ベギンとその支持者たちはイスラエルの政治を再編成したが、アシュケナージ主導が続いている機構では西洋的リベラルの支配と影響が残っている — 軍部、警察、シン・ベト、その他の機関で。セファルディ派が政権を握ると、主として占領地の不法入植地の拡大とユダヤ教施設の特権と資金投入に力を入れた。セファルディ・コミュニティが力をつけて軍や政治機構で支配力を発揮するようになるまでには、ベギンの1977年選挙からほぼ20年間かかった。1996年にベギンの後継者ネタニヤフが連立内閣を組閣し、いったん政権を手放したが復活し、イスラエル史上最長任期の首相となり、セファルディとミズラヒとの連合権力を構築した。今や与党の中でセファルディとミズラヒが急増したので、リクード党中核は、獲得した権力を維持するためにも、変化しなければならなかった。

ネタニヤフは被差別階層の民族グループ（パレスチナ系イスラエル人は除く）、社会・経済的周辺グループ、狂信的ユダヤ教グループの不平・不満を操作・利用して政権を維持しているという分析は間違っていないが、CIA 報告が正しく予測したように、この国独自の力学に基づいて常に何か大変化が起きるという可能性が漂っていた。

ネタニヤフ一派は労働党時代のイスラエルを変えた。アシュケナージの力を永久に封じ込めるために、それまで西欧ユダヤ人が牛耳っていた機構を奪い取る必要があった。建国以来存在していた抑制と均衡システムを変更して、政府の一元支配にもっていかなければならなかった。

イスラエル国内権力争いはガザ・ジェノサイド前からあった。それが大きく顕在化したのは、ネタニヤフが最高裁に逆らって独走し、2023年3月に当時の国防大臣ヨアヴ・ガラントを罷免したときであった。ネタニヤフに抗議する大衆デモが発生、亀裂が表面化した。

ガザ戦争がこの亀裂をさらに大きくした。ネタニヤフ政府は政権への非難を屈折させ、10月7日事件とその後の戦争中の失策の責任を政敵に負わせて、彼らを追放する機会として利用した。

彼らは再び司法に目を向け、西洋シオニストが頭に描いたイスラエル政治システム（例えば三権分立）をまったく異なる体制、つまり、司法を行政権力に従属させる司法改革案を打ち出した。

アシュケナージは政治的権力を失っていったが、経済世界ではカードを持っており、場合によっては劇的变化を引き起こすかもしれないストライキや大規模な市民的不服従運動を展開するかもしれない。

ネタニヤフ派にとっては絶対に妥協はできない。そんなことをすれば、1980年代初期に経験した綱渡りのような苦境に陥るからだ。アシュケナージの政治的基盤にとっては、右翼ネタニヤフやユダヤ教狂信派に従属することは、イスラエル建国の父ダヴィド・ベン・グリンやハイム・ワイズマンの終末、つまりイスラエルの終末を意味する。

両者の間には妥協の可能性が見えないので、イスラエル内戦は一つの可能性、それも差し迫った可能性かもしれない。